

魅せられて綴る藩文学 (三)

藩学「四教室」と先哲

勝間田 三千夫

(会員 佐伯市中村北町二一九)

四、先哲の文学譜

茲に、佐伯藩二万石の藩儒として、藩臣の教育にあたり、また政務の顧問となって、そして、藩学『四教室』の教授として藩士の子弟に教育を授けた。己の学問のその思想に哲学をもっていた穎才の人々を紹介する。その中には、藩学『四教室』に教えを受け、あしたに遊んで帰藩し、教授となって後継者の育成の業に尽力された人もいた。

それは、藩主が人材育成を図るため、藩士の子弟稠人の内より選抜して、学費を給して諸国に遊学させ、帰藩後には任官登用の道を開いていたことによるものであつた。

た。

よって、先哲の文学譜としてここに紹介する人々は、藩の学問所時代から藩学四教室が大政奉還によつて明治四年の閉校に至るまで、藩儒として活躍された人々の、その足跡を顕彰し、郷土の先哲として世に知らしむるものである。

以て、歴代の儒官を年代順に紹介する。

(一) 矢野黙齋 享保十年(一七二五)〜

寛政三年(一七九二) 享年六十六歳

(二) 古田節右衛門 生歿年不詳

(三) 松下筑陰 明和元年(一七六四)〜

文化七年(一八一〇) 享年四十七歳

(四) 中島来華 享和元年(一八〇一)〜

天保五年(一八三四) 享年三十四歳

(五) 高妻芳洲 文化八年(一八一七)〜

文久元年(一八六一) 享年五十一歳

(六) I 水筑道遥 安永六年(一七七七)〜

安政元年(一八五四) 享年七十七歳

II 秋月橋門 文化六年(一八〇九)〜

明治十三年(一八八〇) 享年七十二歳

(七) 楠 蕉窓 文政十一年(一八二八)〜

明治三十五年(一九〇二) 享年七十五歳

(八) 秋月必山 天保十二年(一八四一)〜

大正二年(一九一三) 享年七十五歳

(九) 矢野光暉 天明八年(一七八八)〜

明治四年(一八七二) 享年八十三歳

(一) 矢野黙齋

(一七二五〜一七九二) 歿年六十六歳

黙齋は、八代藩主毛利高標侯の時代、十一歳で初めて仕え、数年のち徳性を以て藩学問所に勤仕し、藩士の指導にあたった。のちに藩学「四教堂」が設立されてからもその道に従い、藩臣はもとよりその子弟の指導に任られた。

黙齋に係る資料不足のため、多く語ることはできないが、唯一、史跡となるものに墓碑銘があるので、それに基つき述べることにする。

黙齋の二男謙は、父母の行状について墓碑に次のように謹書している。

得誠院釋黙齋居士

翁名寛事公粟號黙齋元文元丙辰年十一歳初任

天明二壬寅年致仕也再

命為藩教授生二男四女男者濟美名女者貞淑真

寛政三辛亥年六月十六日卒菟裘春秋六十六葬

城北小野矣翁曾就美仲先生學於東都為人沈黙

而敏也博學而謙也公家之利知無不為教人不倦

夫老吏之純忠者也

銘 曰

九原有興 又用何人 盡心公事 嗚呼臣臣

維時 寛政八丙辰六月十六日

前往妙心退欄頼賢高實林賜柴方袍珠月山七十

三苑拙誌

寛政三辛亥

六月十六日

矢野安太夫寛

「得誠院釋默齋居士」

翁名は寛、字の公栗、號は默齋、享保十乙巳年（一七二五）に生る。元文元丙辰年（一七三六）十一歳の時、初めて藩に仕え、天明二壬寅年（一七八二）に致仕するまで、実に四十六年の間、藩政に執務された。仕学並長するところがあつたと見え、再び命を受けて藩校「四教堂」の教授になつた。

默齋には、室鶴野氏（女）の間に二男四女があつた。男は父祖の業を受け継いで名を為し、女は父母によく仕え、しとやかで、誠実で家事につとめた。

しかし、默齋は、高齢のため多く勤仕することなく致仕し、寛政三辛亥年（一七九二）六月十六日、隠居して間



もなく六十六歳の生涯を閉じた。墓地は城北小野（現・佐伯市白坪小野の丘）に永眠している。

默齋はかつて美仲先生に就いて東都に学び、その資性は沈黙にして鋭敏、博学にして謙恕の人であつた。藩主の利・知に教人をなし、公役にうむことなく、真心から主君のために尽くした忠節の老役人であつた、と。

〔妻〕「鶴野氏貞室自亨墓」



鶴野氏については意識したい。詳しくは後述する墓碑銘をご覧ください。

默齋の妻は鶴野氏の女、默齋とは十歳ちがいである。二男四女（系譜参照）の母であり、そのかたちは、良妻賢

亡妻鶴野氏諱道以享保十九甲寅十二月女五日生宝曆甲戌歲二十一歸於予為人柔順貞黠少言辭喜愠不形於色善幹家事精女紅生男二弘謙女四順慎政脫政早夭一朝忽隨得疾既革困劇言歸安靜體容如常乃語予曰春天命也不足哀惜雖有幼子輩子在妾亦無所憂而更不言若晏然如睡而終實安永甲午年四月廿九日也享年四十有一就葬城北小笠津先塋諱法曰貞室自享嗟予予夙喪先考持母氏及幼弱弟妹數人群居同室亡妻善順事于姑隨友于叔女妹親戚稱焉人無閒言儉約自居不好華飾貧家拮据之勞與奴婢夙興夜寐孳々弗懈纒紉紡績練縫汚滯以衣服長幼倍不罔拜予恒在公署吏事冗劇夜以繼日加之從役于東都數矣然使予未嘗有顧家之憂蓋二十年日晏天不吊未中壽宛逝矣嗟乎老母在堂而色難不終隨予尚幼弱而鞠育不慮也夫囊事竣矣猶不堪哀悼其夫矢笠寬公栗序其大略即其墓為銘曰

無嫌無否 三從道存 有姑有叔  
柔順惟華 閨德不愆 宜室家和  
命之短折 嗟如天何

考子謙謹書

母で婦人の鏡であつた。また、三男(孫)の祖母でもあつたが、ある朝忽諸に疾んで、歳なかにして世を去つた。貧家に家族は多く、毎日召使いのように朝は早く夜はおそくまで、寝る間もなく働いた。母の教えに子どもは相い助けあつて仲が良く、貧しい乍らも幸福な家庭をつくつていた。夫黙齋は恒に公署にあつて、日夜公務に励み、加えて君命に従い東都に赴くこと多く、殆んど留守がちであつただけに、妻に死別した今、家事や幼弱鞠育のことを思えば、哀憾に堪えない。と、父母に孝養を尽す二男謙は、父の哀惜を墓碑に謹書している。

この矢野家系譜(一)は、小栗又一氏の著書『龍溪矢野文雄君伝』の記述と、小野の丘に永眠する矢野家の墓碑銘に基づいて作成した。墓碑によると、黙齋は三世矢笠作之丞府君を高祖と敬尊している。

小栗又一氏は、その著書の一節に次のように述べている。

矢野家の祖先は日田にいたが、藩主毛利氏の転封に従つて佐伯に移住した。矢野家は門閥ではなく中士の格であつた。けれども、今を距る約二百年前(昭和五年の時点)黙齋先生と称せられる学者が出るに及んで、矢野

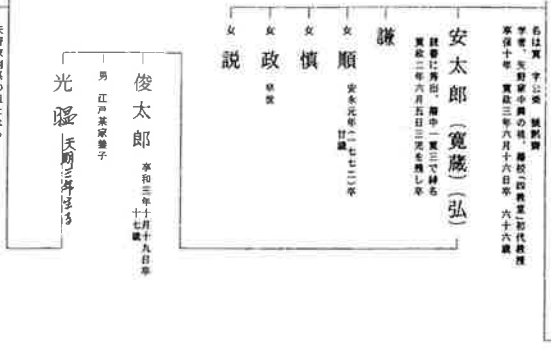
矢野家系譜 (1)



安太夫 (四世)

光五世

矢野家系の祖となる字志「通称多門」



家の名声は、はじめて藩の内外に轟いた。〃默齋先生は、実に矢野家中興の祖である〃と。また、その頃学界は、新井白石、荻生徂徠、室鳩巢、祇園南海、太宰春臺等多くの俊哲が踵を接して現われ、始めて文運が盛んになった。默齋先生の出たのはその時期で、この諸先輩に次いで出て海内の碩学諸先輩と交わりを結んでいた。默齋先生は『論語古訓便釋旁通』等著し、佐伯藩校「四教堂」の教頭として文教を司り、人材の養成と文運の興隆とに肝膽を砕いていて、寛政三年(一七九一)六月十六日卒す。と述べている。

また、室鶴野氏の間には三男一女があり、長男は安太郎、通称寛藏という。読書に秀で藩中で「一寛三」とさえ綽名された。が、不幸にして寛政二年(一七九〇)六月五日、三児を残し、父(默齋)に先だって夭逝した。その長男俊太郎は享和三年(一八〇三)十月十九日、十七歳で世を去り、次男某は、江戸の某家に養われ、家督は三男の光温(後の多門)が継がねばならなくなった。また、母も兄の歿した翌年、即ち文化元年(一八〇四)四月十七日、この少年を残して世を去ったとあるが、三男一女は孫の誤りであろう。ともあれ当時の矢野家の家族は大世

帯であったことが伺える。

さて、天涯孤独の身となった光暉は……天明九年（一七八九）光暉二歳のとき、搖籃の中で父に別れ、母一人子ひとりとなり、母もまた光暉十六歳の文化元年（一八〇四）に逝き、これより光暉は全くの孤児となり、果てた薄倖の少年であったが、こうしてまだ物心のつかぬ頃から、具に人世の艱難を嘗めた。

その後、光暉は伯父（謙のことか）に引き取られ、そこで士としての教養を受けられ、また、藩学「四教堂」に学び、のち藩に出仕するに及んで、矢野家五世は光暉（後の多門）が継承するに至った。

この光暉をもって、矢野家は別系をなし、後章にゆずる龍溪矢野文雄の高祖となる。墓碑は、小野の丘から東京多摩霊園に移されたとみえ、形跡のみが残されている。

なお、因に、先に引用した著者小栗又一氏は、矢野文雄の実弟四男貞雄の一子又一のことであり、小栗家は、誰もが知られる徳川の幕臣で、幕末の徳川埋蔵金で有名な小栗上野介の小栗家に入籍して生れた一子である。

又一の名は、小栗家歴代、徳川家康に許し賜るもので、世々子々孫々に至るまで、用いることができ、世主の名譽とされる名である。

終りに、この度、矢野黙齋先生を語って、浅学ではあるが、改めてその碩学を知ることができ、また、新たに佐伯の香り高い文化遺産に触れることができ、今日まで誌されていなかった事から思えば、郷土史の新たな一ページに加えて頌賛に値するものである。

## （二）古田節右衛門（生死不詳）

古田節右衛門なる人物、藩政時代の寛政年間、藩学「四教堂」の教育に尽力された功績は顕著なものがあつたと思われるが、その足跡を史実として紹介するための資料に事欠き、今後の調査研究課題としたい。ただ、拙著寄載佐伯史談第一五二号の「佐伯藩士古田家」を参照くだされば幸いである。

